
タイトル

Sierra-312

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイトル

【Nコード】

N6181Z

【作者名】

S i e r r a - 3 1 2

【あらすじ】

痛快ではない復讐劇。

注意

Arcadia様の方で廃棄物13号という名で同様の短編を載せました。

S i e r r a - 3 1 2と廃棄物13号は同一人物です。

これは夢だ。

暗闇の中、ライトアップでもされているかのように一箇所だけ光が灯されている。

その周りは、他よりも濃い闇が広がっていた。

通いなれた坂道、幼い頃から何度も上ってきた坂道を駆け上がる。その先に在るのは、高峰家の正門。幼馴染みである高峰ことりの家がある。

周りの野次馬を押し退け、何とか門をくぐり、息も絶え絶えになりながら玄関へと急いだ。

開け放たれた扉から見えたものは、いまもなお広がり続け、段差から零れ落ち水溜りを作っている。それを見たときから足は竦み、身体が震える。

赤黒い　。

命が、あの子の命が、流れ出している。

一面を染め上げる赤黒い血。

濃厚な死の臭い。

その血で出来た小さな水溜りに、あの子は沈んでいた。

仰向けに倒れていたことり。正面から滅多刺しにされたのだろう。服は切り裂かれ、穴だらけになっている。

ことりの目は虚ろだった。

表情もない。

痛かっただろう。苦しかっただろう。辛かっただろう。憎かっただろう。

だけど、死んでしまったことりの表情からは、それらを伺う事はできなかった。

膝を付き、血塗られたことりを抱き上げる。

背後からあわただしくいくつもの声が聞こえ、すすり泣く様な音も聞えた。

「誰か救急車を」

「警察だ。警察を呼べ」

「ひどい」

抱き締めた時、ことりの身体は暖かった。

心臓の鼓動は聞えない。

普段、こうして抱き締めてやっている時は、ことりの呼吸音、心音、筋肉の軋み、何から何まで聞えていた。

いま在るのは、暖かさだけ。

残った温もりだけ。

「君、悲しいのは分かる。だが、血で汚れてしまう」

ボクは顔を上げ、その言葉を吐いた人を見た。

信じられなかった。

ことりの血が汚いと言ったのは、ことりの父親だった。

「……」『汚い？ これほど美しいモノも少ないだろう。原初の色、始まりの色、生命のそのもの。むせ返る様なこの匂い。ああ、この娘に残った全てを貪り尽くしたい気分になる。それに聞いてみたい。お前を刺したキャラクターはどんな表情をしていた？ 刺された時、

お前は何を感じた？』

ボクは動かなかった。

ただ、ゆつくりと体温を失ってゆくことりの身体を抱き締めるだけ。

「君、辛いのは分かる。だが、な」

「タンカーを用意して少女の遺体を運べ」

「親御さんが怪我をしている。救急車はまだか」

警察の人が無理やりボクとことりを引き剥がす。
ただされるがままに、ボクは自宅へと帰された。

警察の人に付き添われ、自宅に付いた後に何をしたかは覚えていない。

ボクは一人暮らしだったから、誰かに聞くことも出来ない。

ただ「強く生きてくれ」と言われたような気がする。

「……」『ふむ？ 放心状態か』

「…… たった一つ、理由、ことが、消えてしまわないように」『ほう、面白い事を思いつく。一人に対する復讐では足りないと？あの娘の死を忘れさせぬ為に犯人の一族すべてを殺すか。だが、どこまで追いかける？』

「全員」『全員？ ハハハハ！！ 血の臭いを追いかけて皆殺しにするが良い』

その日からボクは、幻聴と共に生きた。

復讐という目的の為だけに。あの子が誰にも忘れられないようにするために。

《本日午後六時頃、××××住宅地で遺体として発見された男性は3ヶ月前の殺人犯である事が判明しました。遺体の側には小鳥の人影が落ちており、3ヶ月前に殺害された高峰ことりさんの関係者が殺害に関わっているのではないかと》

面白いニュースだ。

警察もあながちバカではないらしく、犯人がボクであると確定しているらしい。

「まだ、一つ」『そうとも、まだ始まったばかりだ。あれの両親は生きているぞ？ 妹もいるな。その妹も結婚し、夫と娘がいる。親戚は少ないが、従兄弟が3人。あと8つだ。刈り取る果実は8つ、間違えるなよ？』

ことりを殺した男は、ことりよりももっと酷いやり方で殺してやった。

万能包丁で腹を刺し、プラスチックライバーを目に突き刺した。

大きめの布切りハサミで両耳を切り落とし、ノコギリで両脚と両腕を切断したところには、男は死んでいた。

ことりの血は、あんなにも綺麗だったのに。

男が流した血。それはあまりにも汚らしく、汚染された泥沼のようだ。

「臭かった」『あの娘の血の匂いは、なんとも甘美な物だったとい

うのにな』

それからボクは、顔を隠し、姿を変え、自分を殺し続けた。
男の両親は、ボクの姿を見たとき懺悔していた。

そして、こう言った。

「私たちが最後にしてくれ。君のような若者が、うちのバカ息子の
様になってゆくのは辛い」

「いつか来ると思っていたから、遺書には貴女を許すように書いて
あるわ。娘も親族も貴女を訴える事はないでしょう」

「警察が私たちの言葉を聞き届けてくれるとは思えないが、まだ君
はやり直せる。息子の様には成らないでくれ」

あの泣き喚いていた醜い男。

その両親はこんなにも綺麗だった。

とても信じられなかった。

「……」『綺麗事だな。あと6つだ』

何の抵抗もしなかった男の両親は、自分の首から流れた血に沈ん
でいる。

苦しみはしなかったと思う。

何時のころからか、化物みたいになっていた私の腕力。

その全力で首を跳ね飛ばしたのだから。

「……」『さすがはブッチャーナイフと言ったところか？ 屠殺す
る事に長けた刃物なだけはある。だが良かったのか？ 君の腕力で
そんな事をすれば、相手は痛みすら感じずに逝ってしまふ』

男の両親を殺してから数ヶ月。
警察の動きがあわただしくなり、獲物に近づけなくなっていた。
ヒマを持て余したボクは、何となく潜伏先でテレビを見ている。

《いま何処にいるかは分からないが、××××君。もしこの番組を見ているのならば自首して欲しい。君の殺した××夫婦の遺書が見つかった。遺書には君を許す様に書かれていた。……。私も君の気持ちも分かる。だが、君の恋人だった高峰ことりさんはそれで喜ぶのか？ 君が××××の様な殺人鬼に成り果てたサマを見て喜ぶと思うか？ 頼む。自首してくれ。我々に捕まれば君の罪は重くなる。重くなってしまう》

テレビに映し出されていた警察官は、ボクとことりを無理やり引き離れた人だった。

ボクを家まで送り、「強く生きてくれ」と言ってくれた人だった。きつと、良い人なのだろう。

警察官なのに「我々に捕まれば君の罪は重くなる。重くなってしまう」なんて言うくらいなのだから。

「……」『偽善者が……。どうする？ お前の心の中ではすでに残りの6つは除外されている様だしな。何をする？ 自殺でもするか？ もはや生きている意味もない』

自殺。

確かにそれでも良いかもしれない。

でも、ダメだ。

最後に殺さなければならぬ男がいる。

「……」『ん？ はは、アハハハッ！ そうか、あの男か！ 汚いと言ったあの男が許せないか！ いいぞ、殺れ、殺せ！ ズタズタに引き裂いてやるといい』

ボクは獲物を決めて、最後の狩りに出かけた。
これで最後だ。

警察は、男の親族警護に回っている。
ことりの血を汚いと言った男を見てはいない。

日も暮れ、真っ暗になった道を歩く。
ことりと学校に通った道。ことりを迎えに行った道。懐かしい道のり。

色々な事を思い出しながら、ボクは歩いた。
はじまりの場所であり、最後の場所に行くために。

そして、ことりが暮らしていた家のチャイムを鳴らす。
懐かしい。

「はい、どなた様ですか？」

オバさんの声がした。
ボクは答えない。
ただ立っているだけ。

「あの、どちら様？」

「……最後に、会いに来た」

この一言で、オバさんは察してくれた。

そして、玄関の電子ロックを外してくれる。

「入って」

その声にしたがつて、ボクはことりの家へと入った。

玄関、いつもボクに微笑みを向けてくれたことりが死んでいた場所。

そこには、沈痛な面持ちのオバさんが立っていた。

オジさんはいなかった。

「いらっしやい」

「……」

ボクは、オバさんに一礼し、靴を脱いであがる。

オバさんに続くようにして居間に入った。

「あの後ね。夫が急死したの。貴女とことりに謝りながらね」

「……」

知らなかった。

最後の獲物としていた人が死んだなんて。

「夫が言っていたわ。貴女は必ずココに来るって」

「……」

オバさんは椅子に座り、ボクを見ていた。
その目にはもう、生気がない。

「……ことりの部屋、行っても良いですか？」

ボクは聞いた。

オバさんは頷き、言う。

「行ってあげて、あの子は貴女を心の底から愛していたのだから。私は疲れたから、もう寝るわ」

オバさんはダルそうに椅子から立ち上がり、薬を持って寝室へと向かう。

きつと、オジさんに会いに行くのだろう。

「……」『ふむ、最後はここか？　だが、これははじまりに過ぎない。お前が終わり、お前が完成する聖地』

ボクは階段を上がり、ことりの部屋を目指した。

そして、ことりの部屋の扉を開けると、懐かしい匂いがする。

ことりの匂い。

生きていた時には、ボクがこんな鬼になる前には、常に側にあった匂い。

「……いま、逝くね？」

ボクはそう言って、手に持っていた血塗られたブッチャーナイフで自分の首を掻っ切った。

痛かった。

すごく痛かった。

身体の節々から力が抜ける。

ゆっくりと身体の感覚が無くなってゆく。

たぶん、数分もないのだろう。
数秒の出来事なのだろう。

だけど、ボクには長く感じられた。

こうして、ボクは自分の一生を終えた。
人間としてのボク。

同性だったことを愛し、それを受け入れてくれたことりとその
両親。

一つの不幸ですべてが変わってしまったけれど、ボクは最後の最
後まで。

最後の瞬間まで、ことりを愛していた。

《本日午後八時頃、×××市×××住宅地で連続殺人犯××××の
遺体が発見されました。××××は１年前に殺害された高峰ことり
さんの親友であり、高峰ことりさんを殺害した××××を殺害、そ
の両親も殺害したと見られています。また、××××の遺体が発見
された高峰邸の１階寝室からは、大量の睡眠薬を服用し、自殺した
と見られる高峰××さんが発見されました。警察は》

END。

（後書き）

長い文章を面白さを保ったままで書ける人は凄いです。
私も書ける様になりたいな……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6181z/>

タイトル

2011年12月20日19時52分発行